

ゲノフェーファのあらすじ

台本は、フランスの民話をもとにシューマン自身が執筆しています。

第1幕

ジークフリート城の中庭

ブラバントの領主ジークフリートは、結婚したばかりの若い花嫁を残して、戦に出て行かなければならない。彼はカール・マルテルの要請により、フランスを脅かしているムーア人の軍隊と戦うことになったのだ。彼は彼の部下で友人のゴーロに、城と領地の管理を委ね、妻のゲノフェーファの保護を命ずる。司教のヒドゥルフスが十字軍に参加するよう国民に訴え、神の庇護を祈願している。その一方で、ゴーロは城に残るよりは戦に加わることを切願しているが、それが容れられずに悩んでいる。彼は心の平安がそれで乱されるのを恐れている。というのも彼はひそかにゲノフェーファを愛しているからである。

ジークフリートとゲノフェーファはたがいに別れを惜しむ。ジークフリートはもう一度ゴーロに、妻をよろしく頼むぞと言い、彼の留守のあいだ領地の支配者に任命する。いよいよ出発することになり、ゲノフェーファはジークフリートから最後の別れのくちづけを受けているあいだに気絶する。ジークフリートは軍馬に乗り、あわただしく出発する。残されたゴーロは失神しているゲノフェーファに、抗いがたくくちづけする。彼女は目覚めるが、彼のしたことに気づかない。そして夫と別れた辛さで気落ちして城に入る。

ところがゴーロのくちづけを目撃していたものがある。それはゴーロのかつての乳母で、今は黒魔術使いとなっているマルガレータである。彼女は魔術使いのためにジークフリートによって城から追放されたのだが、これを彼への復讐に利用しようとする。マルガレータはゴーロに近づき、彼とゲノフェーファの仲を取り持とうと申し出るが、ゴーロは自分のした不純な行為に苛まれ、それを拒否する。しかし、彼女は彼をうまくまとめ込み、ゲノフェーファをものにできるという希望を彼に抱かせる。それでついにゴーロはその気になり、彼女にゲノフェーファをものにすることを手伝ってほしいと懇願するまでになる。

第2幕

ゲノフェーファの部屋

ゲノフェーファはひとり淋しく部屋にいと、外で下僕たちが酔っ払って騒いだり、歌ったりしているもの音が聞こえてくる。彼らはドラゴがひとりこのばか騒ぎに加わらないと嘲笑しているのだ。彼女の部屋へゴーロがあらわれ、フランス軍がムーア人に勝利したと知らせる。ゲノフェーファはこれでジークフリートがすぐに戻って来ると期待する。勝利を祝して、彼女はゴーロによるこびの歌を所望する。ふたりで歌をうたっているうちに、ゴーロは自制心を失い、ゲノフェーファに愛を打ち明ける。彼女がそれを拒否するにもかかわらず、むりやり抱きすくめようとするので、彼女は彼のことを「卑劣漢」と呼ぶ。ゴーロはその言葉に傷ついて、彼女から身をはなす。彼の彼女への愛ははげしい憎しみに変わる。

ドラゴがやってきて、ゴーロに助力を求める。下僕たちが、ゲノフェーファが副司祭とひそかに情を通じている、と噂しているのでなんとかしてほしいと懇願する。そのときゴーロに邪な思いつきがひらめく。彼はドラゴに、ゲノフェーファの寝室にしのみ込むように勧める。そうすれば彼女の実不実を、その日で確かめることができるというわけだ。ドラゴは同意する。その一部始終を立ち聞きしていたマルガレータは、ゴーロに、ジークフリートは負傷してシュトラースブルクで療養しているという情報を伝える。こうして、ふたりは、マルガレータがシュトラースブルクに急行し、彼に毒を盛るということで意見が一致する。

ゲノフェーファは神に祈ることで乱された心をなだめようとする。するとパルタザルを先頭に下僕たちが、



彼女の不義密通の現場を押さえるために、彼女の寝室になだれ込んでくる。そしてそこにドラゴがひそんでいたのが発見される。彼は弁解するひまもなく殺される。興奮した一団はゴーロの命令で、ゲノフェーファを地下の牢に引き立ててゆく。

第3幕

シュトラースブルクの仮宿

ジークフリートはムーア人との戦いで受けた傷がほとんど治りかけている。マルガレータはジークフリートに身分を隠して仕え、看護婦として彼の信頼を受けている。彼女の調合した毒薬はしかし、彼になんの効き目も発揮しない。また妻の不義をほのめかしても、それをまったく信じない。また過去の出来事を映す鏡があるから、それを見てみてはと勧めても、まったく興味を示さない。彼は一刻も早くゲノフェーファのもとに帰りたいと、そのことばかり考えている。

そこへゴーロが、ゲノフェーファが不義を働いたという偽の手紙をもってあらわれる。ジークフリートは絶望して、もう二度と城には戻らないと決心する。しかし彼はゴーロに彼の結婚指輪と剣を託してこよう命ずる。ゲノフェーファに指輪を示して、それから彼女を処刑するようにと。ゴーロは自分の陰謀の引き起こした結果に恐れおののく。ジークフリートはマルガレータの魔法の鏡のことを思い出す。彼はゲノフェーファの過去をそれによって知ろうとする。

マルガレータの部屋

マルガレータは半睡半醒のなかで、子殺しの夢を見ている。そこへジークフリートとゴーロがやってくる。ジークフリートは鏡を見たいとマルガレータに所望する。彼女はゴーロが良心の呵責に苦しんでいるのを見る。そこでひそかに彼の欲望を刺激し、復讐欲を新たに掻き立てる。魔法の鏡は3つのシーンを浮かび出させる。それらはゲノフェーファとドラゴの親しさを示し、後のシーンほど親密さを増してゆく。怒りのあまりジークフリートは鏡を真っ二つに割り、ゴーロとともにあわただしくそこから出てゆく。割れた鏡のなかからドラゴの亡霊があらわれる。そして彼はマルガレータに、もしジークフリートに真実を告げなければ、火あぶりになると予言する。はげしい不安に襲われて、マルガレータはジークフリートの後を追う。

第4幕

岩山のある森のなか

下僕のバルタザルとカスパルが、城の近くの森のなかの岩山へゲノフェーファを連れてくる。2人は猥雑な歌をうたっている。ゲノフェーファは救助を求め、夫に声をとどかせようとする。彼女は岩の洞穴に聖母像のある十字架を見つける。そして祈るべくその前に脆く。天の合唱が彼女の心の平安を約束する。

ゴーロがあらわれ、指輪と剣を示しながら、彼女に死を言い渡す。しかし、彼は自分と一緒に逃げてくれればそれは免れると言う。彼女はそれを拒否する。彼は下僕たちに彼女を処刑するように命じて、自分は去ってゆく。彼の消息はそれ以来不明となる。

下僕たちは十字架の前で祈っているゲノフェーファを殺すことを躊躇している。バルタザルがやっと剣を振り下ろす決心をつけたとき、狩りの一団の吹くホルンの音が聞こえてくる。バルタザルは逃亡する。ジークフリートはマルガレータに案内されてここにあらわれる。そして気絶して倒れているゲノフェーファの前に跪いて、赦しを乞う。ゲノフェーファは目を覚まし、彼を認め、これはすべて天の采配で、あなたに罪はありませんと言って、彼の罪を赦す。

ジークフリートの部下やここへ駆けつけた人々は、再会した2人を伴って城に凱旋する。

ジークフリート城の中庭

城の中庭では、騎士たちや従者たちが歓呼の声で2人の帰還を祝福する。司教のヒドゥルフスは2人を城の教会の前で待ち受けている。彼はこの辛い試練に耐え、それに打ち克った2人を祝福し、神の恩寵を称える。

(国内盤 CD : TELDEC/WPCS-5921-2 のブックレットより転載)